「高大連携に関わる取り組み」：体験レッスンの試みと洗足学園音楽大学クロスアーツを通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 麻里子, Nishikawa, Mariko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2669

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

教職課程年報　第6号　2022年度

実践研究報告

「高大連携に関わる取り組み」

～体験レッスンの試みと洗足学園音楽大学クロスアーツを通して～

西　川　麻里子
Mariko　Nishikawa

1.　はじめに

日本では1992年をピークに18歳人口の減少が顕著となり、それに伴い高等教育機関の進学状況は大きく変化した。大学進学率が2021年度で52,9％に達した（*注1）のに対し、定員割れの私立大学は46,4％を記録し（*注2）、まさに大学全入時代へと近づきつつある。それに伴い入学者の学習履歴や学習意欲は多様化し、受け入れる大学も多様化・個性化が進んでいるのが現状である。

1999年の中央教育審議会答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』という答申が発表されたことにより、『学生が高等教育から大学教育に円滑に移行できるようにする』ために提唱されたのが「高大連携」の取り組みであるが、これは大学における学習を高校生が事前に経験し単位と認められる、高校と大学が連携して行う教育活動である。そしてこの「高大連携」こそが、進学意欲の向上・教育段階のギャップの解消という諸問題の改善策として全国に広がっている。

立命館大学は接続教育支援センターを設置し「入学前教育プログラム」を入学予定者に実施し成果を上げているし、文京学院大学は併設高校でプレ入学を実施し、高校・大学どちらの側にもメリットのある試みを推進しており、広島大学と近接の立賀茂高等学校は地域に根付いた高大連携の取り組みで注目されている（*注3）。京都では、大学教員・高校教員が手を組み共同プログラムを開発し、高校の正課授業で実践する「実践研究共同教育プログラム」や、地域の高校・大学・その他から約40名の人材を募り、月1回の例会で新しいカリキュラムを実践的に検討する「アドバンシング物理研究会」を立ち上げるなど、高大のみならず地域との連携も図っている（*注4）。他にも三輪田学園と法政大学・森村学園と昭和大学・横浜女学院と東京女子大学など、多くの高校・大学がそれぞれの特色を生かした独自の連携を図っており、現在の日本の教育現場に高大連携は必須のものとなりつつある。

2.　洗足学園音楽大学における高大連携と「クロスアーツ」の存在

本学では、本学受験希望者を対象とした受験準備機関「クロスアーツ」が2017年に設立され、運営されている。洗足学園音楽大学の大きな特色は18コースからなる多種多様な音楽を追究する総合音楽

大学であるという点であり、コースの内訳も従来のクラシックコースの他に、現代邦楽コース・ジャズ＆アメリカンミュージックコース・ロック＆ポップスコース・音楽・音響デザインコース・ミュージカルコース・バレエコース・電子オルガンコース・声優アニメソングコース・ダンスコース・ワールドミュージックコース・音楽環境創造コース、という具合に多岐にわたっている。

但し、クラシックコース受験者は音楽の早期教育を受けているものが多いのに対し、それ以外のコース受験者は高校在学中に進学を決定するパターンが多く、入試までの音楽知識の蓄積不足が問題となる。又、希望コースによっては師事する教育者を見つけるのも難しいケースもある。そのような学生を対象に、専門実技レッスンはもとより、楽典・聴音・ソルフェージュといった「基礎力」を学べるカリキュラムを提供し、それを大学講師陣がきめ細かくサポートするのが「クロスアーツ」の存在である。大学の試験と同様、前期・後期２回の「実力テスト」や「プログレスコンサート」が設定され、総合型選抜コースは「プレカレッジコース」として、所定の条件を満たしてカリキュラムを履修すると大学入学後の単位として認定されるなど、大変充実したものとなっている。

3.　洗足学園音楽大学における「教職課程」

3-1　音楽大学の教職履修の意義と現状

音楽大学の学生にとって、中学校教諭一種免許状（音楽）・高等学校教諭一種免許状（音楽）が取得できる教職課程の履修は、将来の可能性を考える際、大きな魅力である。座学に関してはどのコースの学生もほぼ同じスタートラインとなるが、問題は音楽教諭免許取得に必須の専門科目、特に学習履歴の有無が大きな課題となるピアノ実技である。従来、ピアノコース以外のクラシックコースの学生でも、ピアノ未学習者にはピアノ実技は大きなハードルとなるのが常だが、その際に専門楽器の学習経験や、楽典・ソルフェージュなどの知識が大きな助けとなる。一方他コースにおいては、音楽の知識は中・高校の音楽の授業で得たのみという学生も多く、入学前の音楽専門科目の知識が不足しているのが現状であり、ピアノ初心者も多い。実際に教員になることは希望せず、教員免許の取得のみが目的の学生も多いのではあるが、ここで大きな問題となるのが４年次に履修者全員に必須の「教育実習」である。実習生は受け入れ校で音楽の先生として教壇に立ち、授業内で合唱のピアノ伴奏や歌唱指導の際のピアノ演奏をしなくてはならない状況に置かれる。義務教育の芸術の教科の大幅な授業時間数の削減が行われている現状の中、貴重な教育実習での授業の支障にならないためにもピアノ技術は不可欠であり、実際に受け入れ先の中学・高校の教師から、実習生のピアノ実技力の不足を指摘されるケースも少なくない。

3-2 「教職ピアノ実習」

洗足学園音楽大学の教職課程ではそのような事態を招かぬように「教職ピアノ実習」というピアノ実技のクラス授業が設定されている。履修学生はピアノの学習歴・実力で「初級・中級・上級」という３つのレベルにクラス分けされ、１年から４年前期まで実習Ⅰ～実習Ⅵという段階を組んで半期毎の試験が課されており（実習Ⅵのみピアノ個人レッスン・選択履修）、合格しないと次の実習段階に進めない。試験は課題曲７曲の中から当日指定＋スケール・カデンツの２項目となる。また、本校では特に教

員採用試験の実技試験で課される「ピアノ弾き歌い」に重点を置き、中学・高校の教科書に掲載されている文部省唱歌と合唱曲の中から合わせて40曲程度を選択し、初級・中級・上級のそれぞれの難易度に合わせstep1・step2・step3として本校の作曲科講師が編曲したものを、教職センターで編集し独自のテキストとして使用している。同時にピアノ演奏の基礎となるスケール・カデンツの習得を実習Ⅰ～実習Ⅲに渡り継続的に学ばせるという、細やかなカリキュラムを組んでいる。

1クラスは4名（初級）～6名（上級）で編成され、グランドピアノ1台と6台の電子ピアノが設置された教室でピアノ講師1名が担当し授業が行われる。90分の授業時間内に、グランドピアノで担当講師が学生1名に約20分程度の個人レッスンを実施し、その間待機学生はヘッドフォン装着で個人練習をする（貴重な練習時間の確実な確保の為）というのが基本となるが、授業内容によっては1名がピアノ伴奏で残りの学生が歌唱するパターンや、ホワイトボードなども使用した歌唱教材に関する模擬授業など、学生の状況に応じてバラエティーに富んだ授業が展開できるようになっている。担当講師はピアノ講師が主だが、上級クラスでは声楽講師や作曲講師が担当するなど、多様性を心がけた布陣を取っている。

3-3 「教職ピアノ実習」の抱える問題点

①3つの級のクラス分けの妥当性

履修学生は入学時に「ふるさと」のstep1～3の楽譜を渡され、それを参考に自分の級を自己申告する。これに基づきクラス分けが行われるのだが、この自己申告が余り当てにならず、上級クラスなのに初級レベルの学生が混在することが多発し、授業進行の支障となることが少なくない。

②ピアノ学習歴の不足

ピアノ初心者や学習歴が浅い学生はもとより、経験者でも「長いブランク」・「自己流の演奏スタイルの弊害」などの問題を抱える学生が多く、担当講師にとっては、初級・中級クラスでは授業内のみの指導で試験課題すべてを学生に習得させることは大変な苦労である。「教職ピアノ実習」の他にも副科レッスンでピアノ実技を選択することによりピアノ学習のチャンスは増えるが、カリキュラム上の問題で選択できないコースもある。

③楽典・ソルフェージュ能力の不足

先述した通り、履修学生の音楽履歴に大きな差があり、学生によっては調性・拍感・和声の知識不足はもとよりへ音記号の読譜もままならないケースもあり、ピアノ演奏技術の不足と相まって最終的には教職履修を断念せざるを得ない学生が少なくない。

④スケール・カデンツ習得の困難

試験課題のスケール・カデンツは実習段階が進むに従い調号が増え、実習Ⅲ（2年後期）では初級で受験の場合♯・♭共に3つまで、上級では5つまでが学習範囲となる。ピアノ学習履歴が浅い学生は勿論、スケール・カデンツ未学習の中級・上級クラスの学生にとっても、スケールの指使い・音階構成音の把握・カデンツ構成音の把握は難しい上、練習も指導も伴奏課題7曲の準備にそのほとんどの時間が費やされ、スケール・カデンツが後回しになる傾向がある事は否めない。

4. 問題解決への試み

4-1　各級のリーダーの選出

3-3 で述べた諸処の問題解決と、「教職ピアノ実習」の改善の為、2020 年度後期に教職ピアノ実習の担当講師は、1・2 年生の上級、1・2 年生の中級・初級、3 年生のアドバンスクラス（教員採用試験受験希望者クラス）、3 年生のレギュラークラスという 4 つのグループに分けられ、教職センター長のヒアリングを経てそれぞれのグループリーダー4 名とクロスアーツ担当リーダー1 名が選出された。各リーダーはそれぞれのグループの担当講師と連絡を密に取り、情報・意見交換を活発に行い各級の問題解決・レベルアップを図る。またリーダー5 名と教職センター長、教職センター事務局の職員も交え定期的に会議を行い、諸処の問題解決について議論・相談をして対応する体制が 2021 年度から開始された。

4-2　体験レッスンの実施とクロスアーツとの連携

上記の体制の中、クラス分け後の混乱の回避・教職履修希望者の入学前教育への足掛かりとして発案されたのが「体験レッスン」である。我が校では 1 番早い合格者の決定は 11 月初旬となり、入学までの期間は最長で 5 か月に及ぶ。この期間を教職履修に不可欠な音楽知識とピアノ実技の準備に当てられれば、従来の問題点の大きな解決策になる。体験レッスンを行う事で、学生のピアノの実力や音楽知識の度合いをしっかり見極めて適正な級判断を行う事に加え、「教職ピアノ実習」という授業がどういうものか、その為に何を準備しておくべきか、そして現在の実力がどの程度かを学生に伝えることが可能となる。このアドバイスに従って入学までの期間しっかり準備してもらえれば、学生にとって入学後の学習はかなりスムーズになることが予想される。

また、その準備学習の場の受け皿として、クロスアーツに「教職ピアノ・プレレッスン」というピアノ実技のレッスンコースが新設され、共に 2022 年度新入生を対象に実施された。

体験レッスン受講の手続きと内容は以下の通りである。

①レッスン受講の手続き：

a. 入学手続きの際に教職履修資料を配布→教職履修希望者は先ず全員「体験レッスン」を申し込み、受講する必要がある事を告知。

b. 学生は資料にあるバーコードを読み込み、WEB の申込シートに必要事項を記入し申し込み手続きを完了する。

四

c. 申し込みシートには所属コース・ピアノ学習歴の有無・使用ピアノ教材（曲集）・スケール・カデンツの学習経験（ハノンの 39 番）・自宅の練習環境、の質問が設定されており、その記入内容はスプレッドシートで、教職センターとグループリーダー講師全員が即時に共有閲覧することが可能となっている。

d. 申込み学生の体験レッスンは各リーダー講師振り分けられ、レッスンが実施される。

e. 担当講師はレッスン後、学生の所感と級判定をスプレッドシートに記入。

②体験レッスンの内容：

a. レッスン時間は 20 分。

b. 学生は申し込み時に WEB 配布された「ふるさと」step1～3 の中から自分の弾けるレベルを選び準備。レッスン時に演奏する。

c. 学生の楽典・ソルフェージュ・読譜力を判断する為、以下の課題を実施。

＊新曲視唱（図 1）

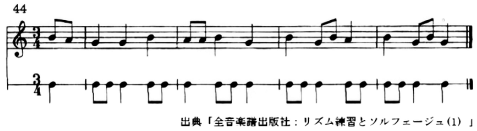


図 1

＊ヘ音記号の視唱。難易度の異なる課題を 2 題。（図 2-1, 2）

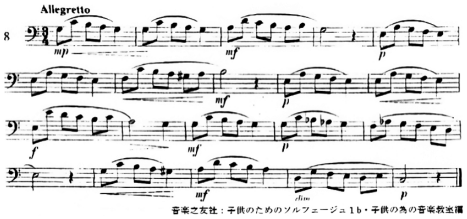


図 2-1

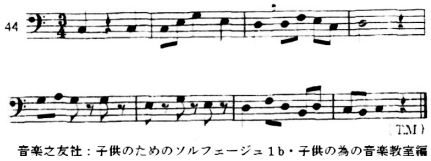


図 2-2

＊リズム課題。同じく 2 題。（図 3-1, 2）

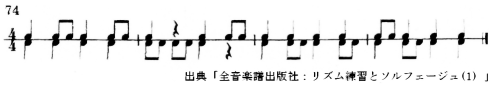


図 3-1

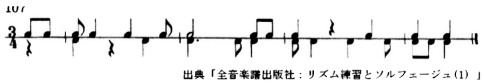


図 3-2

③レッスン時の注意事項：

a. 体験レッスンでの課題設定に関しては、課題曲が難しいことが教職履修を怯ませる原因の 1 つにならないよう、比較的難易度の低い「ふるさと」を選択。

b. 正しい級判定為の補足課題として、3 種類の新曲視唱を用意。特にピアノ初心者のみならず、学習履歴が長い学生にも多く見られる譜面の読み方の問題は、正しいタイミングで必要な情報を譜面から読み取る力が不足していることが原因で、ヘ音記号のラインに目が行かずト音記号のラインばかりを追ってしまうという事と、ヘ音記号読譜自体に慣れていないと事が大きな要因である。その見極めの為、図 1 の様に、1 度にメロディー視唱とリズム叩きという 2 つの要素を組み合わせた課題をメインに行う事とした。

c. あくまでも履修希望者であり、教員免許取得に向けてのスタートラインに立とうとしている学生達なので、ピアノの実力・音楽知識を査定する事のみにならず、入学予定学生を励ましアドバイスをする事にも重点を置く。

d. ピアノ初心者・音楽学習履歴の浅い学生のレッスンでは他の課題は省き、「ふるさと」の課題の

みで新曲視唱・リズム・ヘ音読譜の指導にあたり、分かりやすいレッスンを心がける。
→課題の数が多い事で、「あれもこれも出来なかった」という負の経験を積み重ねさせず、「短時間でもこんなことが出来るようになった」というプラスの経験をさせるよう心掛ける。

e. 上級者にとって「ふるさと」は step3 でも楽にこなせる課題なので、弾き歌い・歌詞の解釈を踏まえたピアノ演奏・アインザッツの声がけ・コード伴奏など、一つ上のレベルにトライさせて新しい事が学べたという経験をさせる。

f. 学生の級判定自体は授業の内容・進行に関わる為、厳しく判定。学期途中でも級変更は可能な事と、上のクラスへの級変更は学生のモチベーション向上にもつながる事から、不安要素が見受けられた場合は１つ下の級に判定する。

g. ピアノ初心者にとっては数か月でもピアノの経験値があることにより、入学後授業でのハンディや負担が軽減されることが見込まれる。その為、初心者・初級者には早急に地元の音楽教室や個人のピアノレッスンまたはクロスアーツなどでピアノ学習を開始し、入学前までに少しでもピアノに慣れておく事を強く進言する。

④体験レッスン実施後の所感と問題点：

a. 申し込み時期がまちまちで総体的には申し込みの遅い学生が多かったが、早かった学生は教職履修に際して、教員希望・音楽教育活動の為の必要アイテム・就職の際のアピール材料など、具体的なイメージを持っており、レッスン日程の打ち合わせ・レッスンでの対応などもしっかりしている者が多かった。

b.「教職ピアノ実習」の授業内容を漠然と普通のピアノレッスンととらえていた学生が多かった。又ピアノ経験者でも歌を意識してのピアノ演奏が初めてという者が多く見受けられた。レッスンを通して「教職ピアノ実習」がピアノ伴奏をメインとした授業であるという体験的な情報を学生に伝えられた手ごたえを感じた。

c. ピアノ学習履歴の長い学生ほど授業履修にあたっての不安や準備意欲が強い傾向が見られた。逆にピアノ初心者は危機感が薄く、入学前のピアノ学習の予定も考えておらず、週１回 90 分の授業を履修する事で自然にピアノが弾けるようになるという楽観的なイメージを持っている学生が多くみられた。これは、予備知識がない事から正確な判断が不可能であろうことが推察される。

d. ピアノ実技の技術はもとより、楽典・ソルフェージュ力の不足が見受けられる学生が想定よりも多かった。

六

4-3　クロスアーツ「教職ピアノ実習・プレレッスン」の実施

体験レッスンで、学生に入学までの準備課題を提案したが、既に音楽教室や個人レッスンでピアノを学習中、或いは開始予定の学生には、担当講師へ使用教材の推薦も含め体験レッスンでのアドバイスを伝言してもらい指導をお願いするという対応を取った。一方ピアノ既学習者でブランクがある者、ピアノ初心者には早急にピアノのレッスンを受ける事を提言したが、その有効な学習場所として提案したのが、クロスアーツの「教職ピアノ実習・プレレッスン」である。レッスン時間は 30 分で月３回、対

面・オンライン両方の対応が可能で遠方居住者も受講可能。クロスアーツでは主科としてのピアノ実技レッスン（50分）の他、副科実技として30分のピアノレッスンが受講可能であるが、「教職ピアノ実習」のレッスンでは授業で使用する教材を用い、実際の授業内容に沿って授業担当講師が指導する、特化した実技コースとなる。加えて体験レッスンでの所感を参考に該当学生の弱点をサポートするレッスン内容となっており、初年度は高校1年/1名・高校2年生/1名・高校3年生/3名の計5名の受講者があり、グループリーダー5名で担当した。

4-4　授業開始後の所感

2022年度は150名近くが体験レッスンを経て教職を履修した。講師による客観的な級判定に基づく初めてのクラス編成となるが、実際に初級・中級・上級3つのクラスを担当した上での筆者の所感は以下の通りである。

＊上級（6名）：担当したクラスではピアノ実技の実力に多少の差は見受けられたものの、楽典・ソルフェージュ能力は全体的に高く、ピアノ実技能力に不安のある学生も練習できちんとカバーができている。弾き歌い課題なども積極的に準備してくるなど総体的に前向きな姿勢が強く感じられた。スケール・カデンツも入学前に準備できている学生が殆どであった。

＊中級（5名）：ピアノ実技・楽典・ソルフェージュ能力共にばらつきが大きく、ピアノはある程度弾けても音楽知識が不足、またはその逆のパターンの学生が混在している。総じて皆とてもやる気はあり、前期最後に筆者の担当クラス全員に課した教材研究発表では、中級クラスの内容が1番充実していた。また、1名に関しては中級受験の課題曲の難易度に本人の実力が及ばず準備が間に合わないと危惧され、前期試験の受験級を初級に変更する事を勧めたが、本人の強い希望と努力により中級課題で準備を間に合わせた。

＊初級（4名）：2名がピアノ初心者、1名は独学且つブランク有り、1名はピアノ学習者だが楽典知識がなく読譜力に問題が見受けられる。驚いたことに初心者2名と独学者1名は体験レッスンでの強いアドバイスにもかかわらず、入学前のピアノ学習を開始していなかった。ピアノ学習履歴のある学生はスケール・カデンツも音楽教室のレッスン指導で準備していた事に比べ、初心者の危機感の希薄さが浮き彫りとなった。又事前に何度も念押しをしたにもかかわらず、初心者2名とも後期から履修可能な副科でピアノ実技を選択していなかった。体験レッスン時でもピアノ初心者・初級者に顕著に見られたこの「危機感の希薄さ」の傾向に大きな興味が湧き、独自で少しリサーチを試みた。結果、自身の能力に関し実際の評価と自己評価にズレが生じる心理現象の一つであり、自己を過大評価する「ダニング＝クルーガー効果」という現象ではないかと推察される（*注5）。これは「自身が認識していることを、客観的に把握する判断する材料・知識」＝「メタ知識」の不足により、ほんの少しの情報を得ただけの状態にも関わらず、まるでその情報について完全に理解して熟知したように錯覚してしまい、自身の実力を過大評価してしまう認知バイアスで、勉強・運動・仕事においても足りない部分を補う努力をしなくなる傾向がある。興味深い事に、「高大連携」論文を数多く読み進める中で、やはり学生に対しこの現象に言及したものがあった（*注6）。ダニング・クルーガー効果は、フィードバックの機会を増やす・客観的な評価を行える場を設けて

事実を明確化することで、錯覚と現実とのズレを改善できることが期待できる。ピアノ初心者に対しては、体験レッスン時から特別な対応処置が必須であることを痛感した。

5.　アンケートの実施

2022 年度の開始後、7 月に体験レッスンを受講した学生（約 170 名）、及び新 1 年生の担当講師（27 名）を対象に効果検証の為のアンケートを実施した。以下はその手順と結果、その分析である。

5-1-1　学生対象のアンケート

設問は以下の通りである。

①体験レッスンを申し込んだ時期を教えてください。

1. 合格発表直後～1ヵ月以内
2. 合格発表後 1ヵ月～2ヵ月程度経った後
3. 合格発表後 2ヵ月～入学式直後

②①の質問で 2, 3 を選択した人は、何故その時期になったかを教えてください。

1. 教職履修を迷っていた。
2. 教職センターから、申し込み呼び掛けのメールが来るまで、教職履修者が体験レッスンを受けることを知らなかった。
3. その他

（理由を書いてください。）

③体験レッスンを受けた感想を以下から選んでください。

1. とても良かった
2. 良かった
3. 普通
4. あまり良くなかった
5. 良くなかった

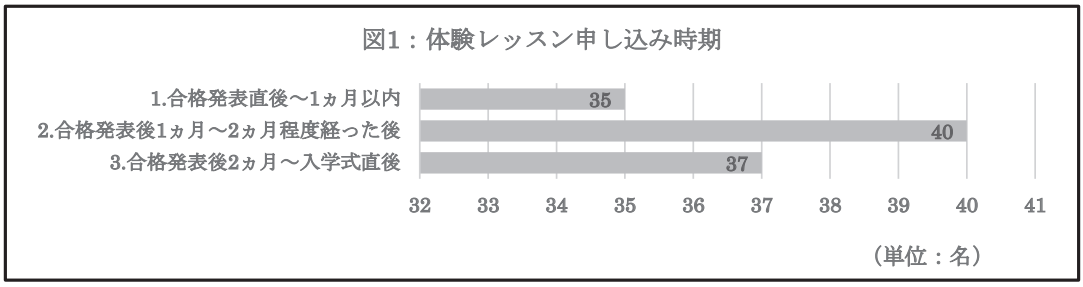
④③の質問でその感想を選択した理由を教えてください。

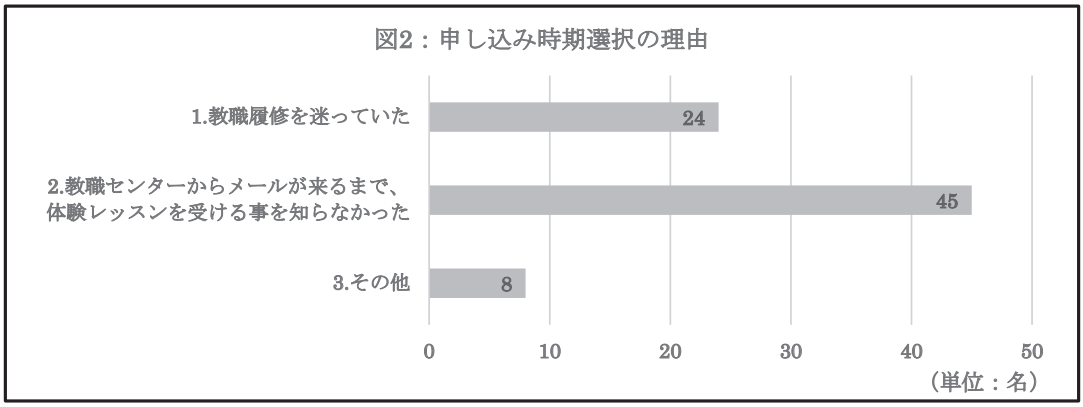
⑤体験レッスン受講後、教職履修を申し込まなかった人はその理由を教えてください。

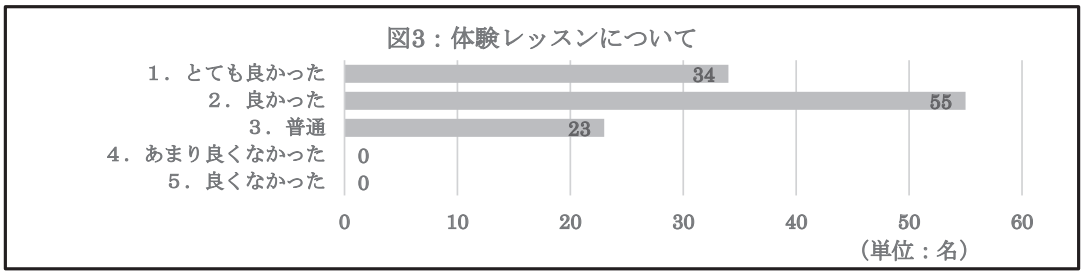
⑥教職を履修した人に質問します。

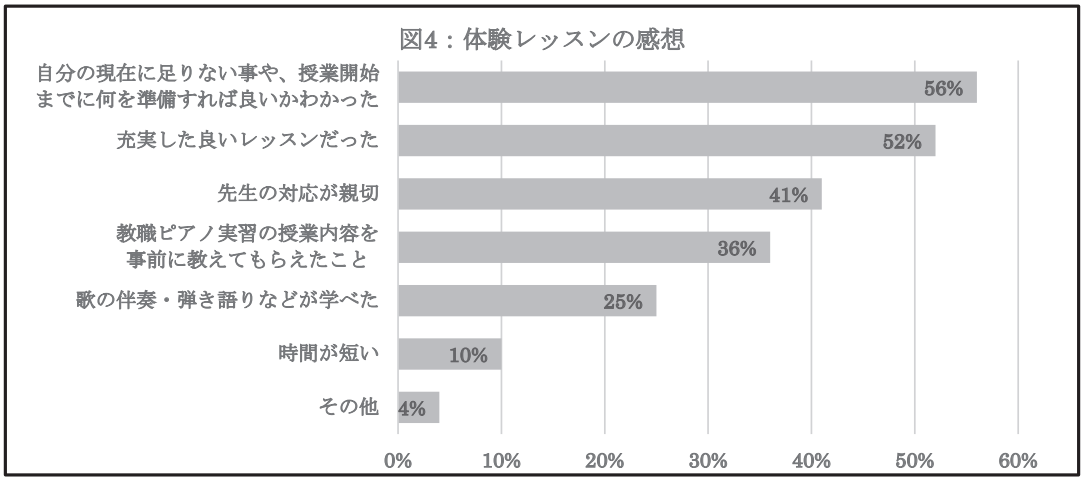
1. 教職ピアノ実習の授業が始まり 2ヵ月が過ぎましたが、体験レッスンで受けたアドバイスで役に立った事を教えてください。
2. 実際に授業を受けていて、もっとこんなことを準備しておけば良かった、と感じることがあれば具体的に書いてください。

112 名の回答を得た。以下、図 1～7 に回答をまとめたものを示す。









九

図5：教職履修を申し込まなかった理由（回答者10名）

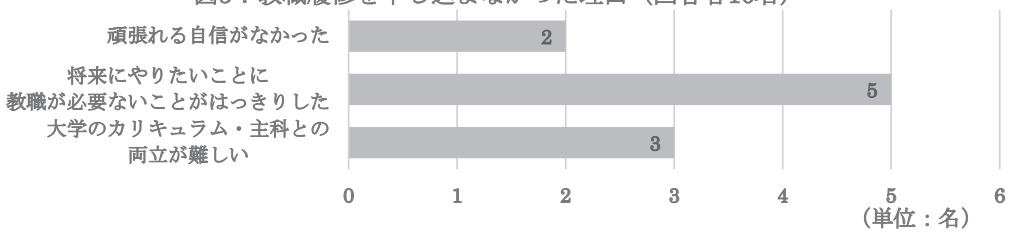


図6：体験レッスンの際のアドバイスで役に立ったこと

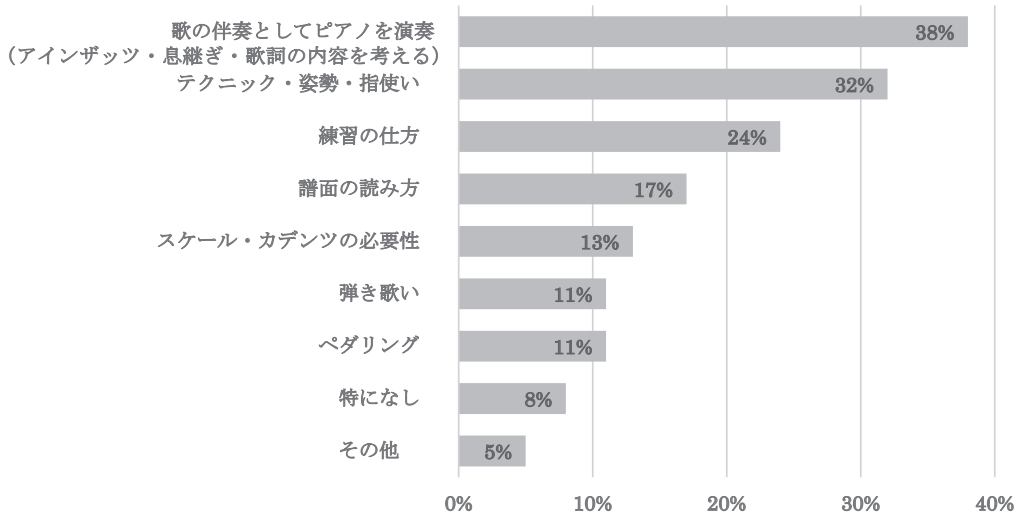
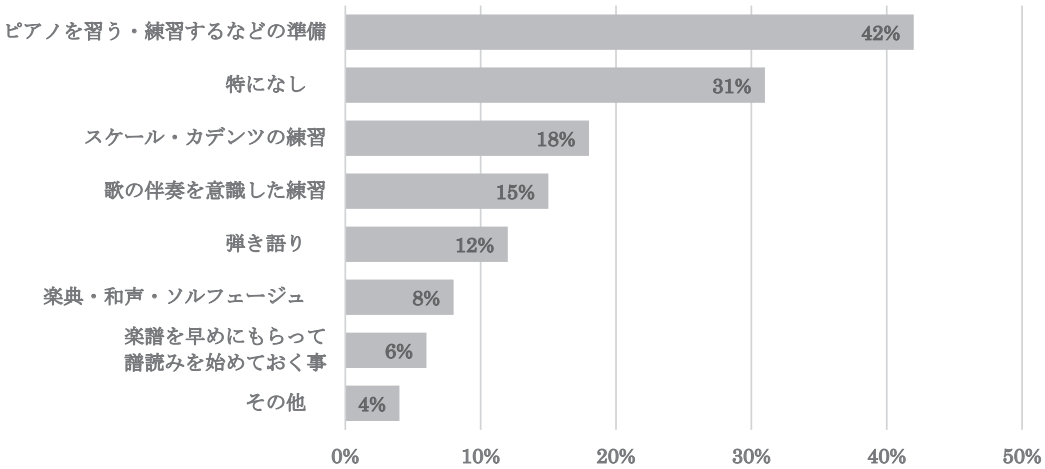


図7：実際に授業を受けて、
入学前に準備する必要性を感じたこと



5-1-2　学生アンケート結果の分析

①申し込み時期が遅いことは、体験レッスン設定の大きな意義の一つである「入学前の準備期間確保」に大きな支障をきたす。そしてその原因が配布資料の見落としによるものであり、教職センターからの受講を促すメール連絡により解消されていることから、次年度からは体験レッスン受講案内は配布資料のみではなく、合格発表直後に一斉メールを送ることで解決を図る事とした。

②体験レッスンを受けた感想は押し並べてポジティブであり、「教職ピアノ実習」の授業内容の情報取得・準備すべき内容のアドバイスなどが大きな助けになっているのが見て取れる。又、レッスン担当講師の対応が学生の履修決定の後押しとなっている事が覗えた。一方ネガティブな感想として圧倒的に多かったのが「レッスン時間の短さ」である。これは受講者のレッスン内容によって、「短かったが充実した有用なレッスンであった」という意見と、「短い時間に沢山の事を説明され混乱した」という対極の感想を引き出すことになったようだ。

③体験レッスンでのアドバイスの有用性に関しては、「歌の伴奏としてのピアノ演奏の認識」の多さが挙げられる。合わせて「教職ピアノ実習」が「中・高校の音楽授業でのピアノ伴奏の習得」を主眼とした授業であるという情報を得たことにより、学生の履修への安心感・入学前準備の目途の獲得にも繋がっているのが見て取れる。ピアノ実技に不安を覚えている学生には「奏法上のアドバイス」が有用であり、ソルフェージュ・歌唱の必要性に気が付く学生も多く見受けられた。一方で、「特になし」をあげた学生が少なくないのは憂慮すべき結果である。

④授業開始３か月を過ぎた時期でのアンケートの実施であり、実際の授業を受ける中で、入学前に何を準備しておけば良かったかの判断材料・経験値は十分だったと思われるが、かなりの学生が「特になし」を選択している事実は驚きであった。これは既出の「ダニング・クルーガー効果」によるものかは現時点では分からないが、今後観察していかなくてはならない重要な問題点である。又「入学前の準備の不足」を実感している学生が圧倒的に多いのは予測していた通りである。「クロスアーツで、プレレッスンを受講すべきだった。」という意見もあり、体験レッスン時にもっとクロスアーツに関する情報を充分に伝える必要性も感じられる。

5-2-1　担当講師対象アンケート

設問は以下の通りである。

①担当クラスの級をお知らせ下さい。

②該当の級が妥当と思われない学生が配当されていましたか？

1. ほぼ妥当。

2. 上のクラスでも良かった。

理由：

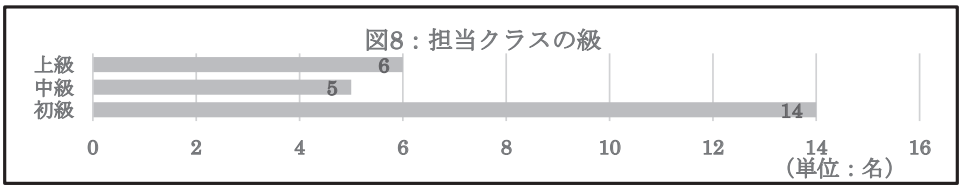
3. 下のクラスの方が適当。

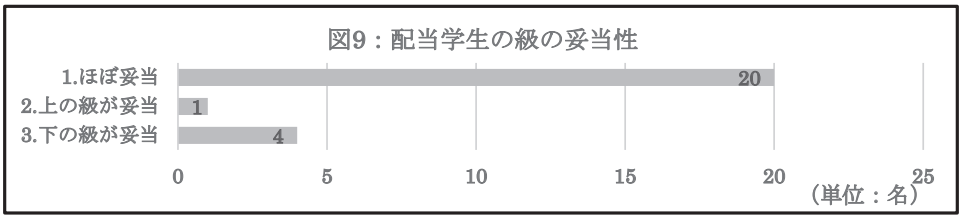
理由：

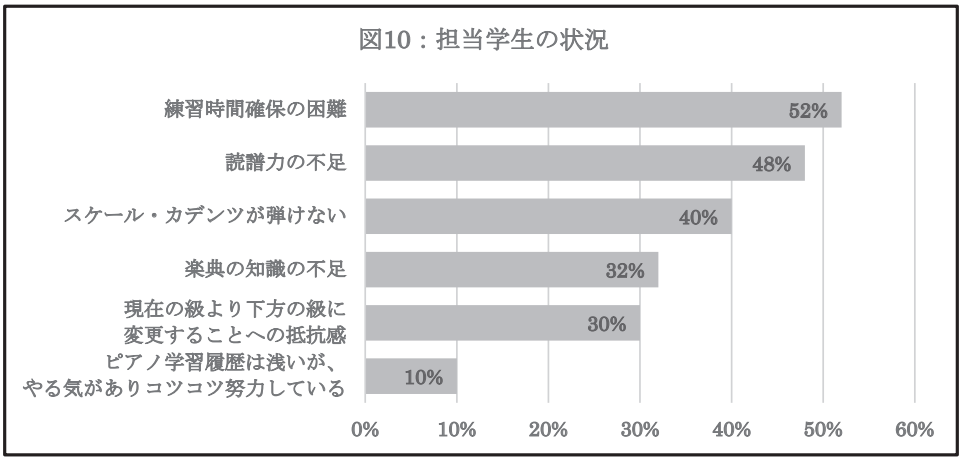
③担当学生達の状況で、気がついたこと・特に不足と思われる点等お気づきのことを、具体的にお知らせください。

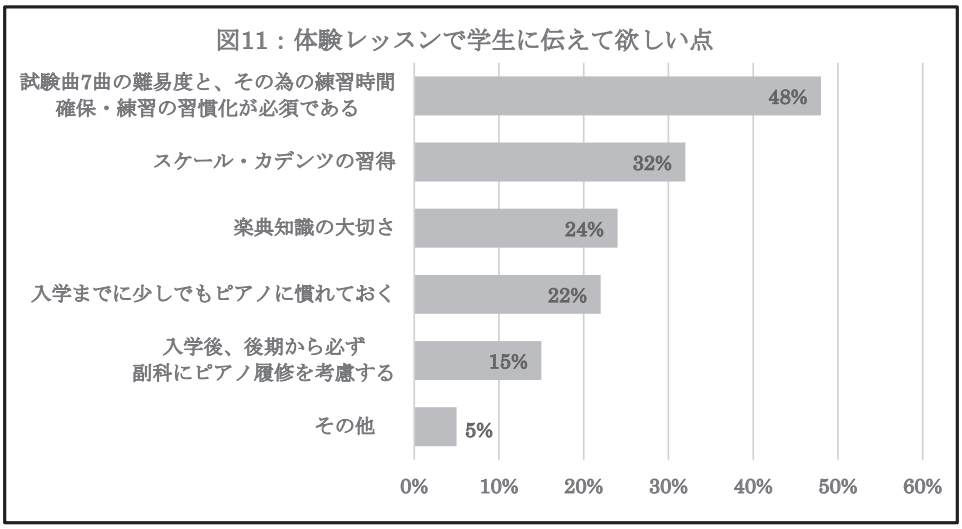
④体験レッスンで学生に注意喚起させておく事・伝えておいた方が良い事など有りましたらお知らせ下さい。

25 名の担当講師から回答を得た。以下図 8～11 に回答をまとめたものを示す。









5-2-2　担当講師対象アンケートの分析

①一番心配された担当クラスの学生達の級判断の妥当性であるが、概ね妥当との判断であった。今後の議論すべき課題としては、体験レッスンの課題とした「ふるさと」1曲のみでの級判断が妥当かどうかである。「ふるさと」はstep3を選択しても演奏・読譜も比較的容易であり、これで中級・上級と判断された学生にとって、前期の課題曲「こきりこ節」・「茶摘み」・「Believe」における難易度は一気に跳ね上がる事になる。読譜力に問題のある学生、逆に読譜力があっても、力む・手のフォームの不備などピアノ奏法に大きな問題を抱える学生の中には、その級での受験課題曲の準備が難しく、級変更を考慮せざるを得ないケースが生じる。そして、実際に学生に級の下方変更を提案した講師から、その後の学生のモチベーション低下を指摘する報告もあった。

②担当講師から得た学生の状況のアンケート結果は、総体的に学生の自己評価のそれとほぼ一致するが、多数の担当講師が問題点として挙げた「ピアノ練習時間の不足・習慣的な練習の継続努力の不足」は学生側にはあまり実感されていないことが覗われる。この乖離を埋める機会の1つとして、体験レッスンでの対応を考える必要性が感じられた。

③体験レッスン時に、入学前までの準備を促す資料として「教職ピアノ実習」の前期課題7曲とスケール・カデンツの譜面を配布出来ないかという提案が担当講師数名から上がったが、この点は既に体験レッスン実施前のグループリーダーの会議で何度も論議され、結局は事務手続き上難しいのではとの懸念から却下された案件である。学生・担当講師の両アンケートの結果からも、もう一度考慮する必要性を痛感した。

6.　まとめと今後の課題

今回の結果を分析する事により、体験レッスンの効果の有用性を認識する事が出来た。先ず、クラス編成の級の混在はほぼ解消されたと考えられる。入学前のピアノ学習の準備に関しては、クロスアーツの受講や地元音楽教室でピアノ学習を開始するなどアドバイスを取り入れる行動が見られ、ある一定の成果は上げられたが、スケール・カデンツの習得および楽典・ソルフェージュの知識の拡大に関しては未だ解決策を探っていく必要がある。また、入学前準備が一番必要とされる初心者・初級者にはアドバイスが充分に伝わっていないという結果からもわかる様に、事前に想定した配慮や伝えられたと考えていた情報が、学生に思う様に理解されていない点も明らかになった。

「教職ピアノ実習」の授業の大変さを強調しすぎる事は、学生の教職履修の諦めを引き起こし、教職履修に託した夢や希望の芽を摘み取る事にもなり兼ねない。それを回避するためには、履修後のピアノ上達の弛まぬ努力と充分な練習の必要性を丁寧に伝えることが必須であるが、20分と限られた体験レッスン内では限界があるのも明白で、何か他に学生への情報提供の有効な手段を考える必要性がある。

以下、状況を改善する手段として2点を挙げる。

①教職履修過程のピアノ実技科目である「教職ピアノ実習」に関するWEB資料の作成：

→入学前のピアノ実技の準備に関するガイド・カリキュラムで扱う一部の曲やスケール・カデンツの譜例集・「教職ピアノ実習」のカリキュラムや試験の内容を、分かりやすくまとめWEB資料

として作成する。この URL を学生の体験レッスン申し込み後に送られる教職センターからの確認メールに添付し、レッスン受講曲「ふるさと」の準備と合わせ、体験レッスン受講前に必ず目を通すように案内する。→レッスン内での説明時間短縮・初心者の危機感希薄を回避する情報提供・入学前準備の参考資料として活用する等、色々な意味で役立つであろうことが期待できる。

②課題の「ふるさと」は据え置き、補助課題として「主は冷たい土の中に」を取り上げ、余裕のある学生にはこの曲も準備してもらう。初級レベルの学生は「ふるさと」準備で手一杯となり、この曲の準備にまで手が回らないことは容易に予想されるが、事前に「教職ピアノ実習」で扱う曲に触れられることは授業内容の具体的な情報獲得として有用であると思われる。

以上、2022 年度に初めて適応された「体験レッスン」とクロスアーツとの連携についての実施報告とその考察をまとめた。今後一定期間はその効果の検証を継続し、こまめに対応を検討することが必須である。そしてそこから更なる発展が得られることを期待したい。

謝辞

アンケートの実施並びにデータの提供は本学教職センター事務局に多大なご協力を頂きました。紙面を借りて深く御礼申し上げます。

注：

注 1：リクルート進学総研　2021 年発表

注 2：河合塾　2021 年発表

注 3：川合宏之著「我が国における高大連携の変遷と今後の展望～より自主性を尊重する教育へ～」2018 年

注 4：内村浩著「京都の取り組みを中心とした高大接続教育の実践例 ～草の根の高大連携～」2010 年

注 5：酒井豊和著「ダニング＝クルーガー効果とは？陥りやすい人の特徴と対処法」
https://motifyhr.jp/blog/training/dunning-kruger_effect/　2021 年公開、2022 年 8 月 19 日アクセス

注 6：高大連携授業を通じた探究活動の相互連携の試み

－山形大学と米沢興譲館高等学校を事例として－

2021 年 大杉尚之（山形大学人文社会科学部）・本多薫（同左）・小林正法（同左）

山本陽史（エンロールメント・マネジメント部）

参考文献：

①高大連携による教育交流ネットワークの構築

－コミュニケーション教育研究会の活動とコミュケーションリテラシー－

2009 年 小棹理子・伊藤善隆・田村新吾・岩崎敏之・藤澤みどり・高橋可奈子

原満・住谷勉・佐藤明宏・小林久美子・石田英弥

②メンタリングを重視した e-Learning 導入による高大連携の取組み

－情報系国家資格の取得支援を例として－

2009 年 矢原 充敏・宮川 幹平・徳永 克美・佐竹 則昭・齋藤 守正・高橋 守人

③我が国における高大連携の変遷と今後の展望

－より自主性を尊重する教育へ－
2018 年 川合 宏之（流通科学大学）

④高大連携授業を通じた探究活動の相互連携の試み
－山形大学と米沢興譲館高等学校を事例として－
2021 年 大杉尚之（山形大学人文社会科学部）・本多薫（同左）・小林正法（同左）
山本陽史（エンロールメント・マネジメント部）

⑤京都の取り組みを中心とした高大接続教育の実践例
「－草の根の高大連携－」
2010 年 内村 浩（福井大学）